

史跡活用と昔話

加原 奈穂子

近年、土地に伝わる昔話や伝説を、地域おこしの素材として用いる試みが全国で盛んになっている。中には、それらの舞台とされる場所を、地域の文化遺産として保存・顕彰するだけでなく、観光名所として売り出そうとする動きも見られる。本報告では、岡山県の「桃太郎伝説」の事例に焦点を当てて、如何なる歴史的・社会的文脈のもとで、特定の昔話が地域の伝統として意味づけられ、どのような形で史跡の活用と結びついてきたのか、それがもたらした問題は如何なるものか、といった点を中心に、地域住民・行政・研究者・マスメディアなどの立場を異にする主体の関わり合いに注目しながら考察を行った。その試みは、本来の口頭伝承研究の枠組みを逸脱するものではあるが、シンポジウムでの議論で指摘されたように、どのような対象を如何なる方法で扱ってゆくことができるのか、あるいは、研究対象に対する研究者自身の関わり方は如何にあるべきか、といった問いにつながるものでもある。

桃太郎伝説の概要と本報告の視点

まず、本報告で扱った「桃太郎伝説」についてであるが、本来、桃太郎は架空の「昔話」であり、特定の時代や場所の設定を持たない。しかし、現在、その内容が土地の具体的な事物と結びつけられ「伝説」化している場所が、日本全国に十カ所近く見られる。中でも、岡山県岡山市の西方に広がる「吉備路」^{きびじ}は、愛知県犬山市栗栖^{くりす}とその周辺地域、香川県高松市の鬼無^{きみなし}・女木島^{めきしま}と並んで、桃太郎の「三大伝説地」と呼ばれる。なお、本来、吉備路とは備前・備中・備後・美作に及ぶ古代吉備国全域を指すが、本報告における吉備路とは、岡山市西部の吉備の中山辺りから総社市、倉敷市にかけて広がる旧山陽道沿いの歴史的文化財が集中する地域を言う。このような吉備路の名称や桃太郎伝説地としてのイメージは、実際にはこの数十年のうちに創られたものに過ぎないが、現在では、地域の主要な伝統と見なされるまでに定着している。

岡山の桃太郎伝説は、昭和初期、岡山市在住の彫塑・鍍金家、難波金之助によって、『桃太郎の史実』（一九三〇）の中で提唱された説¹。桃太郎の昔話の原型は岡山県の代表的伝説「吉備津彦命の温羅退治」であるとする²に基づいている。吉備津彦命の温羅退治伝説は、吉備国を荒らしまわっていた温羅が、大和朝廷から派遣された吉備津彦命によって、激しい戦いの末に征伐されるといふ内容であり、吉備津彦命が桃太郎、温羅が鬼に

見立てられている。この伝説は、吉備津彦命を主祭神とする吉備津神社や吉備津彦神社の縁起類や土地の口頭伝承によって伝えられてきたものであり、翻刻されたものだけでも二〇を超えて異本を確認することができるが、伝説の内容にはそれぞれ若干の違いが見られる。なお、現在、一般に流布しているのは、岡山市出身の歴史学者である藤井駿が『吉備津神社』（一九七三、日本文教出版）等の著作で提示した、諸異本を総合して口語訳・簡略化した話を元にしたものである。

加えて、岡山の桃太郎伝説を裏付ける根拠として言及されるのが、名物の吉備団子と桃である。これらの成立の歴史を紐解いてみるだけでも、桃太郎伝説が非常にちぐはぐな要素の組み合わせで成り立っていることは明らかである。たとえば、吉備津彦命の温羅退治伝説に関する年代の明確な最古の記録は、『備中吉備津宮勸進帳』（一五八三）の中にあり、遅くとも室町末期には、ほぼ現在の形が成立していたと推定される。一方、老舗の廣榮堂の先祖らが吉備団子を考案したのは幕末であるが、岡山名物として知られるようになるのは、日清戦争、日露戦争の際に、故郷へと凱旋する兵士たちが縁起のよい土産として買い込んだことが契機となっている。また、岡山で桃が全国有数の栽培面積を誇るようになったのは明治三〇年代であり、栽培が本格的に開始されたのも明治初期のことに過ぎない。

このように岡山の桃太郎伝説が持つ矛盾点を挙げることは容易いが、論者の目的は、それが偽りの伝説であると指摘するこ

とではない。むしろ、問題は、何故そのような矛盾に満ちた説が地域を代表する伝説として受け入れられていったのか、ということである。そして、そこでは昔話とその伝承を取り巻く環境に如何なる変化が生じていたのだろうか。また、そうしたテーマを十分に捉えるためには、何を素材として、どのような方法で、研究に取り組んでいけばよいのだろうか。本報告で言及した対象は多岐に及ぶが、中には、媒体の性質や商業性、あるいは雑多で些細なものであるために、民俗学の研究対象に値しないと判断されるものもあるだろう。ただ、論者は、そうした既存の研究枠組みを念頭に置きつつ、まずは現象の全体像を可能な限り把握したうえで、必要に応じて関連諸分野の研究手法や知見を取り入れながら、自らのテーマに即した研究方法を模索してゆくことが必要であると考えている。

桃太郎伝説の提唱と昔話の変容

難波が桃太郎伝説を提唱した背景には、当時、愛知県や香川県の桃太郎伝説地が話題を呼び、観光資源としても注目を集めていたことがある。吉備津彦命の温羅退治伝説の舞台は、吉備津神社、鬼ノ城きのじょうという郷土の史跡や名勝を含んでおり、しかも、その一帯は一九三〇年十一月の開催を間近に控えた陸軍大演習の舞台でもあった。ただ、戦前、難波の提唱は、岡山市を中心にある程度の支持を得たようだが、桃太郎伝説地としての全国的知名度は、愛知県や香川県の例に遠く及ばなかった。

ここで昔話の変容に関して注目すべき点として、論者は、難波が前提としていた桃太郎が一種の「国民童話」とでも呼ぶべきものであったことを挙げておきたい。桃太郎といえは、日本の口頭伝承研究の重要なテーマであり、各地方で語り継がれたユニークな桃太郎話も数多く報告されている。岡山県では、稲田浩二や立石憲利に代表される口頭伝承調査のすぐれた蓄積があり、鬼退治の部分が猿蟹合戦の話と結びついた「猿蟹合戦型」の桃太郎や、横着者だが最後には山仕事で力を発揮する「山行き型」の桃太郎（鬼退治部分なし）など、特徴的な桃太郎話が多く報告されている。口から耳へと語り継がれたこれらの昔話の大きな特色は、本来は人間同士の現場での対面的コミュニケーションの中で実現される一回限りのものであり、その内容から語り口に至るまで多様性に富んでいることである。

その一方で、桃太郎は、一八八七年に文部省編纂の『尋常小學校読本』（巻一）に初めて掲載されて以来、第二次世界大戦の終結に至るまで、小学校の国語教科書に数多く取り上げられてきた。学校教材への採用がもたらした最大の変化は、数ある昔話の一つに過ぎなかった桃太郎を、いわば「国民童話」の位置にまで押し上げたことではなかっただろうか。国民童話については、国文学者の島津久基が『日本国民童話十二講』（一九四四 山一書房）の中で、「一地方だけの特殊な民間口碑でなく、国民一般に知られ語られ親しまれている童話で、且文学化されて（文字による童話の形となり）一層国民全体のものとなっているもの」としてい

る。論者は、この定義を踏まえたいうえで、文字で記述され、印刷物等を媒体として国民に広く受容されていること、記述に用いられるのが国家の言語としての標準語であること、主要場面や主要人物のステレオタイプ化された視覚イメージが広く共有されていることを挙げておきたい。国民童話は、国語や国歌、国旗などと同様に、近代日本の国民国家形成にとって重要な装置の一つでもあった。さらに、巖谷小波による「桃太郎主義」の主張に代表されるように、近代において、親孝行や国家への忠誠といった国民道徳を体现する存在として、桃太郎を表彰した例がしばしば見られる。また、一九三〇年から開始された朝日新聞社主催の健康優良児表彰事業が「桃太郎さがし」の名で呼ばれたように、桃太郎は少国民の健康な肉体の象徴でもあった。

「吉備路」と史跡活用

「吉備路」は、重要な歴史的文化財が集中する県下有数の観光地であり、古代吉備文化を象徴する場所として、また桃太郎伝説の舞台として知られている。吉備路に残る個々の文化財を、周辺環境を含めて保存しようとする活動が本格化したのは、一九六〇年代半ばのことである。高度経済成長のもとで、岡山県でも水島臨海工業地帯建設に代表される産業化の波を受けて、市街地に近い吉備路一帯では急速に開発が進み、埋蔵文化財包蔵地や豊かな自然環境の破壊が懸念されるようになっていた。こうした事態に対して、吉備路という名称を提唱し、その保存

運動を立ち上げたのが、一九六六年に岡山県の財界有志を中心として結成された「吉備路顕彰保存会」であった。

行政の動きをみると、岡山県は、一九六六年には「県立自然公園条例」を制定し、吉備路の一部を「吉備史跡立自然公園」(岡山市、総社市、倉敷市に及ぶ *Sanjika*) に指定している。さらに、一九七〇年には、県政百年記念事業として、備中国分寺跡を中心とする一帯に「吉備路風土記の丘」を建設することが決定した。吉備路の保存運動を主導した行政関係者や吉備路顕彰保存会の目的は、単に保存を唱えるだけでなく、吉備路を新しい時代の県民の「心のふるさと」として顕彰し、積極的に活用を進めようとするものであった。その後、吉備路では、榑築遺跡、高松城水攻め跡、鬼ノ城などに代表される大規模な史跡の発掘調査と整備事業が次々と進められてきた。特に、温羅の居城であったとされる鬼ノ城では、二〇〇〇〜二〇一〇年度にわたり、古代山城としては全国初の大規模な整備と復元が進められ、吉備路観光の新しい拠点としても、大きな注目を集めている。また、吉備路の文化財保存活動の進展に伴って、山陽新聞社主催で行われたシンポジウム「古代吉備国論争」(一九七八年五月から翌年二月にかけて六回にわたり開催)に代表される、吉備の古代史の見直しに関する議論も盛んに行われてきたが、そうした議論の中でも桃太郎伝説への言及が度々見られる。

吉備路の文化財への関心が高まる中で、桃太郎伝説は観光宣伝や観光コースの作成の格好の素材となってきた。その一方で、実

際に吉備路を訪ねてみると、桃太郎伝説に登場する各名所の説明板にさえ、桃太郎への言及はまったく見当たらない。こうした状況を全体的に見ると、岡山の桃太郎伝説に特徴的な使い分けが生じていることに気づく。一般の人びとに馴染みやすい形で活用しようとする場合、全国的な知名度があり、キャラクター性が高い桃太郎が用いられる。逆に、本物であることが重視される文化財の解説などでは、吉備津彦命の温羅退治伝説を取り上げて、いわば教育的に活用するといったことが通例となっているのである。

また、広域観光地である吉備路では、吉備津神社は岡山市、鬼ノ城は総社市、榑築遺跡は倉敷市といった具合に、桃太郎伝説に関わる各名所が位置する行政区域が異なるため、活用に向けた整備方針や観光宣伝に各自治体間で違いが見られる。さらに重要な問題は、岡山の桃太郎伝説が、吉備の古代史に関わる吉備津彦命の温羅退治伝説に結びついており、しかも、古代吉備国を代表する文化財を舞台としてしていることである。一口に行政と言っても、文化財担当と観光担当の部署は異なり、文化財の「活用」という同じ言葉を使っていたとしても、その進め方に対する意識や対応には大きな開きがある。観光担当の立場では、桃太郎伝説を観光資源として捉えて、吉備路の観光宣伝や観光ルート形成に活かそうとする一方で、鬼ノ城や榑築遺跡のような考古学的意義の大きな史跡を扱う文化財担当の立場では、それらの説明板に、桃太郎伝説のようなものを記載するなどということは、通常は認められない。こうした事情が、観光案内

で桃太郎伝説地として紹介される吉備路に桃太郎の姿が見えないという、矛盾した状況を生み出す要因となっている。

地域シンボルとしての桃太郎

岡山の桃太郎伝説に関して、論者がこの十数年にわたり調査を続けてきた理由には、学問的関心は勿論であるが、個人的な背景もある。桃太郎伝説の舞台である吉備路の一部は論者の出身地であり、桃太郎伝説の活用が進む過程を間近で見ながら育ってきた。現代の桃太郎活用の歴史を遡ると、鍵となる人物としてまず名前が挙がるのは、「希代の名知事」と呼ばれた三木行治（任期一九五一～六四）である。三木知事は、温かく実行力のある人柄、柔和な風貌が桃太郎に似ていると言われ、「桃太郎知事」の愛称でも親しまれた。三木知事の四期十三年余りに及ぶ在職期間は、水島臨海工業地帯の建設に代表される農業県から工業県への脱皮が推進されると共に、市町村の統合再編、県内交通網の整備なども進められ、岡山県にとっての大きな転換期であった。一九六〇年、第十七回国民体育大会岡山大会を控えて、岡山駅前に立てられた桃太郎像は、まさに現代の岡山の地域シンボルとなった。

一九七二年三月の山陽新幹線岡山開通の前後からは、岡山の観光宣伝や観光案内、観光用のシンボルマークなどに桃太郎が登場する場面が目立つようになる。一九七六年には「春の岡山まつり」が「岡山桃太郎まつり」と改称され、桃太郎をテーマとした祭りとして、「桃太郎のふるさと」岡山の宣伝に大きな役

割を果たした。また、民間主導による他の二大伝説地に対し、岡山の桃太郎伝説の特色は、特に現代において行政主導で活用が進められてきたことである。それが民間の活動へと広がりをみせるのは、一九八八年四月の瀬戸大橋開通が契機となっている。瀬戸大橋博覧会では、手塚治虫が描いた桃太郎がキャラクターマークに採用されたほか、桃太郎サイエンス館、桃太郎冒険館などが設置された。その頃から、民間の企業や団体、商品などの名称やシンボルマークに桃太郎を用いる例が着実に増加している。こうした多様な領域に及ぶ桃太郎活用の事例を辿ってゆくと、「地域の明るい未来を表現した」とされる「水辺のももくん」像（岡山市市制百周年記念事業）がある一方で、「献血ルームももたろう」、「特別養護老人ホーム桃太郎」など、従来の桃太郎話の文脈やイメージとはかけ離れた使用も目立つ。二〇〇五年の第六〇回国民体育大会岡山大会のマスケットキックラクター「ももっち」のように、他県の人びとからは桃太郎とは到底思われないであろう金髪に体装束の図像が、桃太郎として受け入れられている様子を見ると、桃太郎は岡山の伝統として定着すると共に、現代の人びとの関心に対応して独自の変貌を遂げているようにさえ思える。以上のような状況を総合的に考えると、一方では吉備津彦命の温羅退治伝説を介して吉備路の文化財や吉備の古代史と結びつき、他方では地域社会の変化や現代の人びとの関心に応じて様々に活用されるといった、本来は方向性を異にする動きが相まって、「桃太郎のふるさと」岡

山のイメージを強化することにつながってきたと言える。

研究成果の地域還元と研究者の立場

近年、研究成果の地域還元を求める声も強いが、行政やマスメディアの文化活動への関与という問題に対して、民俗学としては如何なる立場があるだろうか。論者が桃太郎関係の展覧会、各種の催し、原稿執筆などに携わってきた背景には、研究調査を通して得た多くの方々との出会いがあった。特に思い出深いのは、元・日本桃太郎会会長の故・小久保桃江先生である。小久保先生は、三〇代の初めに、幸福の原点としての智・仁・勇・健康・富の大切さを子どもにも分かるように説きたいとの思いから桃太郎の話を再発見して以来、一〇四歳で他界されるまで、桃太郎に関するあらゆる領域に目を配り、一心に研究を続けられていた。その数千点とも言われるコレクションをもとに、二〇〇五年には岡山市デジタルミュージアム開館記念「おかやまと桃太郎」展が、二〇〇六年・二〇〇七年には岡山県主催の「岡山桃太郎王国記念館」展（大規模観光キャンペーンの一環として、岡山城の一部で実施）が行われた。

で語り継がれた桃太郎話を聞くことのできるコーナーを設けたほか、絵巻、草双紙類、絵本、漫画、映画、音楽、玩具類などの多様な資料を集め、桃太郎の世界の広がりや時代とともに移り変わるその姿を実感できる構成とした。また、自明なものとして扱われがちであった桃太郎伝説についても、その成り立ちや活用の歴史を振り返る展示も行った。準備段階では、桃太郎のようなものが展示に値するのかわという問いも受けたが、最終的には、様々な角度から桃太郎を再考する試みとして、新聞やテレビなどでも好意的に取り上げて頂くことができた。こうした経験は、論者のような関心を持つ者にとっては、外部からは分かりにくい行政の仕組みや各組織の関係、仕事の進め方などを具体的に理解できたという点でも大きな収穫であった。ただ、展示内容に如何なる注意が払われたにせよ、それが地域に予測できない影響を与えることもある。それに共通する問題は、たとえば、研究者の発言や活動がマスメディアによって伝達されたり、あるいは、その著作が地域で読まれたりすることによって、研究者が一種の権威として、研究対象に何らかの意図せぬ影響を与えてしまうといった場合にも見られる。こうしたことを考えると、研究対象に研究者が如何に関わるべきか、また、研究活動やその地域還元が生み出す意図せざる効果などについても記録・考察の対象とし、今後の参考となる議論がさらに積み重ねられてゆくことが必要ではないだろうか。

（かはら・なほこ／東京芸術大学）